書評

編集・発行
関西大学生活協同組合
組織部
「書評」編集委員会
編集人　原田秀徳

吹田市千里山17
TEL 388-1121
内線　776

書籍購入グループを創設し
一括共同購入を推進しよう
書籍の生協一元化をかちとろう

世紀転換期のドイツ・マルクス主義
久松俊一

大正デモクラシー
小山仁示

書評

『幸徳秋水』
小林良彰

『世界資本主義の歴史構造』
荒井政治

『革命とコンミューン』

私の研究ノートから
古代の謎に挑む　I
網干善教

手記　—死への郷愁—

巻頭言

書籍サークルの活動報告

■カット写真は長野重一作品「万博のある都市大阪」（アサヒカメラ4月号）より

巻頭言

「戦後民主主義」が国民的統一理念として崩壊している。これは独占資本の思想的攻勢に反体制側の政党や団体が対応しきれていないことを示すと同時に「戦後民主主義」の虚構性の死臭がぴまんしている。「戦後民主主義」を葬り去った主体的行動と、この理念の存在してきたことの条件・基盤の崩壊は鋭く、われわれは〝変革期〟にいかに考え、行動するのかが問われている。日本資本主義の再編は労働者内部の分化、対立、労働者と小ブル層の分化、対立、農民層の分解、対立を生み出して来ている。

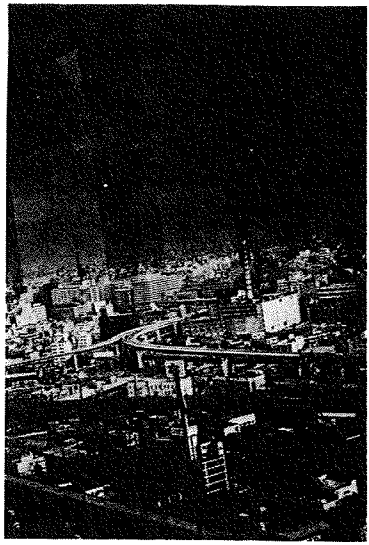
更に若手労働者と中、高年労働者が資本の有機的構成の高度化に伴って分化、対立している。それ以上に〈労働者階級独自の要求〉が徘徊しはじめている。

この様に、政治経済の流動化と階級再編が、個人の日常的生活との熾烈な葛藤を伴う一方遠心的に空間に拡散された隔絶した現象様相を呈している。それ故に、現代社会の危機の相剋の深さを、個人は日常生活の中で疎外、孤立として感じている。それ故に支配者が誇らしげに産業社会を語れば、疎外、孤立感は個人的、あるいは既制の「常識」「概念」でもって糊塗することは砂上に楼閣を築くように、いやそれ以上に身体を病魔に蝕まれるように感じていく。二〇世紀後半、自からの生産、創造物のもとに主体性の喪失として現象していることを知っている。

それは、国家独占資本主下の大量生産と強制消費の循環構造の再生産の重圧下、「人間性」の追究とは、逆の現実の生活、営為の虚構性の拡大再生産へと駆りたてられていること、〈複雑〉すべき相手にである。そこでは、「人間性」の追究を肉体的、現実的、物質的欲望と「錯倒」、「糊塗」されれており、このことは暴力的大量生産構造を支えており、誇らしげに語られる産業社会の進展の速度と呼応した生活に戦慄せざるを得ないのだ。であるが故に、自己の日常生活体験からの観念の葛藤、自己の矛盾を自己の生活思想の営為として至難と苦痛を伴なわざるを得ない自己を何に表現しうるのかが現在的に問われているといえる。

社会的、階級的総体に規定されている自己が諸現象に対しての諸行為、実践の内容を〈基底〉へ視透えることといえよう。

それは、感覚的拒絶を組織的拒絶体との循環構造をもちうること、生産、思想の虚構性の暗黒の海原に〝小舟〟をこぎ出す作業の開始を要請されているのではないだろうか。この〝小舟〟をわれわれの生活、思想の虚構性からの脱皮への埠頭としてつくりだすこと、即ち〈虚構性〉への挑戦―未来の無限の領域に向かって、雑多な〝小舟〟の航海を眺ざすべきだろう。



大正デモクラシーへの胎動

■石川啄木と鈴木文治

小山仁示

明治末年の思想状況

「梅の鉢に花がさいた。紅い八重で、香ひがある。午前のうち、歌壇の歌を選んだ。

社へ行ってすぐ、『今朝から死刑をやってる』と聞いた。幸徳以下十一名のことである。ああ、何といふ早いことだらう。さう皆が語り合った。印刷所の者が市川君の紹介で会ひに来た。

夜、幸徳事件の経過を書き記すために十二時まで働いた。これは後々への記念のためである。

薬をのましたせいか、母は今日は動悸がしなかったさうである。」

石川啄木は、一九一一年（明治四四年）一月二四日の日記に、こう書き記した。一九一〇年に幸徳秋水らは逮捕され翌年のこの日に天皇暗殺計画の汚名で処刑されたが、この大逆事件は、日本国内の社会主義者・無政府主義者絶滅をくわだてた第二次桂内閣の強烈な思想弾圧の実行であった。こうして、日清戦後から日露戦後せっかくもりあがった労働運動・社会主義運動は、大正中期までいわゆる「冬の時代」の苦難をむかえることとなった。

だから、日本の資本主義が、日清・日露の二度の戦争をへて急速に発展していくとともに、近代的科学や芸術をまなぶ学生・教師・ジャーナリストなど、あたらしい中産階級・小ブルインテリの層が一つの社会層としてうまれてきたことも、歴史の必然性として、たしかな事実

であった。かれらは、近代精神や合理主義を身につけ、わが国の学問と芸術を発展させるとともに、半封建的な天皇主義的な思想や道徳の非合理性、あるいはブルジョア的な卑俗さを批判した。大逆事件による政府の圧迫も、このようなかたちで広範にうみだされてきた小ブルインテリの近代的な自我意識や合理主義・批判精神までかりとることはできなかった。強烈な自我中心主義にたつ白樺派が、大逆事件のさなかの一九一〇年に出発していたことは、その意味でまさに注目すべきである。翌一一年一月には、大正期の近代的自我形成の思想傾向に大きく影響した西田幾多郎の『善の研究』が刊行された。三月には、普通選挙法案がはじめて衆議院を通過して（貴族院で否決）、大逆事件直後にもかかわらず、ブルジョア層以下中間層の反専制意識が予想外に増大していることを示した。九月には、『白樺』の女性版ともいうべき『青鞜』が創刊された。

こうして、新しい時代への胎動は、だれの目にもあきらかであった。だが、はなやかにスタートした白樺派にしても、自我の解放と拡充のテーマを大胆に追求したが、これを社会的にはとらえなかった。上流社会の子弟で比較的に市民的自由のなかに成長し、西欧的な近代精神と思考方法を身につけた白樺派のグループは、自己に注目したが、個人と社会の相いれない矛盾に気づかなかった。そこには、他人の解放の思想が欠落していた。自然主義やスバル派も、社会的解放を除外していた。明治末年の若き知識人たちは、自己主張のみに精いっぱいで、権力の問題からあえて目をさけ、社会の重圧におしひしがれている貧困な大衆の存在に目をつぶっていた。

国権への抵抗の方向

このような当時の日本社会における知識青年の思索生活を根底から批判し、その状況をうちやぶるための方向を示したのは、石川啄木の「時代閉塞の現状」（一九一〇年八月）であった。

ロマン派の詩人として出発した啄木は、貧困と放浪のなかでしだいに明治の実現と対決しはじめ、小説『我等の一団と彼』や三行詩短歌『一握の砂』を書いたが、幸徳らの大逆事件でもっとも深い衝撃をうけた文学者であった。大逆事件の弁護人であり、スバル派の同人であった平出修から、事件の真相をくわしく知り、裁判記録などを借りることのできた啄木は、急速に社会主義に接近した。

「時代閉塞の現状」は大逆事件の発覚後まもなく書かれたもので、啄木はここで、個人生活と国家との関係について、すくなくとも当時のだれよりも深刻かつ痛切な思考をめぐらしている。徴兵や税金がすべての国民に強要されているのに、国民から徴収した税金で建てた学校が一部富裕階級に独占されているのはどうしたことか。そのような矛盾が、教養ある青年たちに、「国家は強大でなければならぬ。我々は夫を阻害すべき何等の理由をもっていない。但し我々だけはそれにお手伝ひするのは御免だ！」という「何人も予期しなかった結論」を導かせているのだ、と考えた啄木はいう、「それは一見彼の強権を敵としているやうであるけれども、さうではない。寧ろ当然敵とすべき者に服従した結果なのである。彼等は実に一切の人間の活動を白眼を以て見る如く、強権の存在に対しても亦全く没交渉なのである」と。

この一論は、当時の文学の主流であった自然主義をめぐる論争、とくに魚住折蘆の「自然主義は窮せしや」（一九一〇年六月）「自己主張の思想としての自然主義」（同年八月）の批判として書かれた。魚住は、安倍能成・阿部次郎らと同じ漱石門下であったが、自然主義の存在理由を積極的に肯定しようとした。自然主義と自己主張との結合は、「オオソリティといふ共同の敵」に対抗するためだ、というのである。啄木は、魚住の分析が当時の「青年の思索的生活の半面」を指摘したのをみとめながらも、オーソリティ＝国家という共同の敵に対する結合説を否定した。日本の青年はかって強権に反抗したことはない、白鳥対藤村、泡鳴対抱月という内的矛盾が自然主義に一括されているのは、共同の敵がないからだ、共同の敵、理想がなく、分断した自己主張だけをもつ「内証的、自滅的傾向」「理想喪失」は「時代閉塞の結果」だと啄木は批判したのである。この理想をうしない、出口をうしなった時代閉塞の現状を、どうすればうちやぶることができるか、そこにかれの思考の真剣さがあった。

「斯くて今や我々青年は、比自滅から脱出する為に、逆に『敵』の存在を意識しなければならぬ時期に到達しているのである。それは我々の希望や乃至其他の理由によるのではない。実に必至である。我々は一斉に起って先づ此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て盲目的反抗と元禄の回顧とを罷めて、全精神を明日の考察―我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬ。」

この「明日の考察」が、「強権の勢力は普く行亘る一方で、「貧民と売淫婦との急激なる増加」がみられる現状にたって、青年が「敵」の存在を意識すべきだとの主張であった以上、啄木の一論は、明治末年の思想状況へのもっとも深い分析と、その閉塞をやぶるための革命的思想闘争の方向をしたものであった。

半封建的な天皇制権力による専制的支配と、それによりかかって急速に発展す

る資本主義による一般民衆の生活破壊、とくに労働者に対する無制限的搾取という現実のもとでは、天皇制権力そのものに自己の人間的尊厳を対置するかまえと、あらゆる意味で人間性を圧殺されている貧民・労働者の解放とが、思想の次元で統一的にとらえられなければならないことを、啄木は知ったわけである。明治の社会主義者は政治的プログラムのみを追求し、明治四〇年代の小ブルインテリは社会関係ぬきの自我の解放・拡充をもとめた。啄木は、このような明治社会思想の痛弊をのりこえようとし、すすんで知識人と民衆の真の結合をめざそうとした。ここにおいて、明治国家が上からおしつけてつくりあげることに成功した天皇制ナショナリズムを、その深部から批判する内発的な思想形成の可能性が生まれたといえる。

鈴木文治の周辺

だが啄木の苦闘にもかかわらず、自我解放・拡充を社会主義的思想と結合させる方向は、大正初期の段階で一つの勢力とならなかった。「冬の時代」ということばで表現される強圧のせいもあったが、労働者階級が質的にも量的にも未成熟だったことがその根本的要因であった。しかも天皇制のもとに成長する日本の資本主義は、その基底にもつ半封建的な諸関係のゆえに、一層はげしく矛盾を露呈する。とすれば無力な社会主義にかわって、小ブル自由主義思想の先進的部分が当面の社会的力とならねばならない。その役割を果したのが、いわゆる大正デモクラシーの本隊ともいうべき民本主義思想であった。そして、その民本主義の先駆として、友愛会を設立した鈴木文治の思想をとらえるべきである。

明治から大正と年号がかわって最初に記録された歴史的事件は、友愛会の設立（一九一二年八月一日）であった。当時の友愛会は、労働者の共済・修養団体にすぎなかった。だがそれは、貧困と無権利の状態におさえられていた労働者階級の覚醒をうながし、やがてはわが国最初の全国的労働組合に発展するという、大きな歴史的社会的役割をおのずからになっていた。

鈴木文治は、中学時代よりすでに吉野作造・小山東助・内ケ崎作三郎の影響下にあり、一九〇五年（明治三八年）に東大に入学してからは海老名弾正の本郷教会に属した。海老名は熱烈な愛国社で日露戦争を讃美したが、同時に木下尚江の非戦論に教壇を提供するという自由主義的心情の持主でもあった。本郷教会には、多くの学生・青年が出入し、安部磯雄・浮田和民・島田三郎・吉野作造らも会員であった。一方、大学で鈴木の心をとらえたのは、社会政策学会の桑田熊蔵の講義であった。卒業後は、佐久間貞一創立の印刷会社秀英社を経て、東京朝日新聞社社会部に就職した。この記者時代に大逆事件や南北朝正閏論争がおこったが、同僚の石川啄木と無政府主義について議論もしている。朝日を退社ののち、統一基督教弘道会（日本ユニテリアン弘道会）の社会事業部長となって、労働者対象の社会事業をはじめた。このような過程を経て、法学士鈴木文治は、労働者の団体たる友愛会の設立にいたったのであった。

こうしてみれば、鈴木文治を生みだしたのは、日露戦争前後の時期から日本の知識人をとりまいたらしい思想傾向、やがて大正期になって開花する民主主義・自由主義の風潮であったことがわかる。右にざっとあげた鈴木の周辺の人物や集団は、いずれも政治上・思想上の民主主義・自由主義に結びついていたし、とくにかれが同郷の先輩として尊敬した吉野作造・小山東助などは、のちの大正デモクラシーのにない手たちである。東大時代の鈴木に衣食の道をあたえた本郷教会は、当代一流の社会主義者・自由主義者たちの思想的啓蒙の舞台となっていたが、その会員の過半は学生を主とする青年層で占められていた。あたらしい思想をもとめる若きインテリ、そのなかの一人が鈴木のあり、鈴木はいわば大正デモクラシーの先駆的風潮のなかに育った。そしてかれは友愛会を設立することによって、みずから大正デモクラシーの先駆となった。

社会的力たりうる思想

鈴木文治を生みだした明治末期における大正デモクラシーの先駆的風潮なるものは、天皇制国家権力の専制支配への自由主義的立場からの批判と、資本家による前近代的・無制限的搾取への人道主義的立場からの反対の思想であったといえる。小ブル自由主義者鈴木は、階級闘争や社会主義思想を強く排斥した。だがかれは、大逆事件後の「冬の時代」のさなかに、前近代的労働関係のもとに呻吟する労働者に同情し、資本家の無制限的搾取に反対し、労働者の道徳的自覚による人格向上をはかるために、労働者の組織に手をつけはじめた。そこには、当時の知的エリートの忘れた「他人の解放」があった。鈴木こそ、社会的力たりうる小ブル自由主義思想家として、記録されてよい。

この「他人の解放」と、一九一三・一四年（大正二・三年）の第一次護憲運動で表現された民衆の政治参加要求つまり専制批判の二つを中心課題とすることによって、民本主義が成立する。同時に、この意味での民本主義は、一九〇七年（明治四〇年）の日本社会主義の硬軟両派分裂以後、社会改良主義に転じて労働者保護と普通選挙要求をあくことなく説き

続けた片山潜的方法の継承でもあった。

ともあれ、社会主義者が孤立し、労働者階級が未成熟な段階で、新時代の気運に即応して、民衆運動を指導する理論としての民本主義がたちあらわれたわけであるが、それは以上にみたとおり、明治末年以来のもろもろの小ブル自由主義思想の頂点に達したものであった。

友愛会がのちに日本最初の全国的労働組合へと脱皮し、日本労働組合総同盟が戦闘的な階級闘争を展開したことから、その創立者たる鈴木文治を、過去にさかのぼってまで社会主義者であったとみあやまるならば、鈴木の思想の限界や不徹底性、あるいは日和見性のみが問題となる。一方、もともと小ブル知識人のグループとしてとらえられる白樺派や青鞜社の「他人の解放」を忘れた「自我の拡充」の革新性のみが高く評価されることとなる。だが啄木がするどく指摘した「時代閉塞の現状」をうちやぶるための方向、知識人と民衆の真の結合を実践したのは、白樺派などとは少しちがったところに育った小ブルデモクラット鈴木文治だったのである。それはやがて鈴木の恩師吉野作造が唱導するところの民本主義思想として結実し、大正後半期の民衆運動の大きなたかまりを準備したといえる。この意味で、明治末年の思想状況のなかに大正デモクラシーの先駆的風潮をさぐる作業は、鈴木文治を支点とすることによって、より明確な様相を呈するのである。石川啄木の思想の先進性はいうまでもなく、その啄木の到達点を座標として、鈴木文治の思想と実践を大きく評価する必要を力説しておくこととする。

（文学部助教授　日本史専攻）

グローバルな視野で

河野健二・飯沼二郎編　「世界資本主義の歴史構造」

荒井政治

一九六〇年代の経済史研究は、わが国でも外国でも「産業革命」ないし「工業化」の問題に焦点がおかれ、それに関連した著作や翻訳が数多く産み出されたが、単に量的に豊かであったばかりでなく、質的にみても著しい向上をみた。したがって五〇年代までに出された書物を今日、読み返してみると、既に時代おくれの感を抱かせるものが少くない。ここに紹介する本書は、このような六〇年代の学界動向とその成果をふまえた労作であり、過去十年にわたる共同研究のいわば決算報告である。

本書は三年前、同じ編者のもとに刊行された『世界資本主義の形成』の続篇であって、次のような篇別構成になっている。

第一部　世界資本主義の概念　永田啓恭
第一章　世界資本主義と国民経済　河野健二
第二章　自由貿易主義の世界体制　飯沼二郎
第三章　世界資本主義の論理構造　角山　栄
第四章　重工業資本主義と資本輸出　入江節次郎
第五章
第二部　討論

内容的には世界資本主義の形成からその確立まで、年代でいえば一七六〇年から一九一四年までが本書の対象となっているが、特に一九世紀後半に力点がおかれている。

さて、われわれが第一に興味をひかれるのは、「世界資本主義」という野心的な概念をもち出した狙いというか、積極的に主張したい点は一体どこにあるのか、ということである。この点は編者ならびに他の論者の論調から察すると、要するに資本主義を単に国民的類型において捉えようとする研究方法の限界を克服するために、各国民経済が織りなす相互関係、いいかえれば相互間のインパクトとレスポンスの関係、において捉えることを強調したいようである。別のいい方をすれば、一国の資本主義の発展をそ

の内部から捉えるだけでなく、外的な国際的な契機を重視して、世界史的視野の中で捉えるべきだ、と主張しているようである。そこで、さまざまの構造をもった各国民経済を総合した「世界資本主義」という概念をもち出し、それを国民経済を規定づける重要なファクターとして個々の国民経済の上位に位置づけようとするのではあるまいか。

紙幅のつごうで「世界資本主義」を中心概念とする本書の理論的フレイム・ワークについては、その全容を紹介することは出来ないので、ここでは「世界資本主義」発展の三段階について簡単に紹介しておこう。まず第一段階（一七六〇―一八五〇）はイギリス綿工業（消費財生産部門）の再生産循環を中心とするグローバルな資本主義体制、次の第二段階（一八五〇―一八七三）は機械工業・鉄道建設ブームを梃子とするイギリス鉄工業（生産財生産部門）の発展を中心とするそれ、そして以上の二部門の重層的発展に続く「資本輸出時代」を第三段階（一八七三―一九一四）とする。

本書が最も多くのページを当てているのは第三段階を扱う章である。ここでの論者の分析は国際収支にまで及んでいるが、もし紙幅が許したならば、いま一歩進んで「交易条件」の変化についても言及していただきたかった。というのは、輸出品と輸入品の平均価格の動きは、低開発国（一次産品の供給者）と先進工業国との貿易関係に重大な影響力をもつからであり、単に世界資本主義の変容過程を分析する一視角を提供するのみならず、読者が今日の国際問題を正しく理解する上にも役立つのではないかと思われるからである。

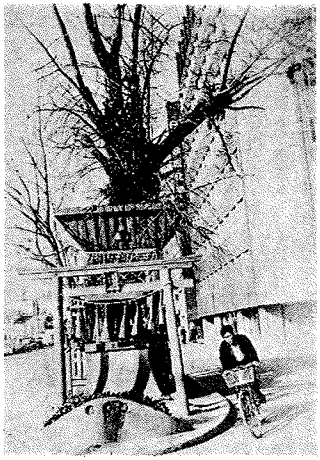
読者はときに耳馴れない用語に出合って戸惑いを感じることがあるかもしれないが、経済発展をグローバルな視野で捉えることの今日的な重要性に気付かれるはずである。さらに労を惜しまず第二部の「討論」の部分（本学経済学部の松岡助教授も参加されている）をも読破されるならば、近代経済史研究の問題点と研究方法について必ずや多くの示唆をうけるにちがいない。

岩波書店
（経済学部教授・西洋経済史専攻）
『イギリス経済史の研究』未来社刊

《書評》編集委員募集

書評は〝思想運動〟を追求、学術文化活動の交流媒介の場としての意義を持った月刊誌です。あなたも《書評》の編集に参加してみませんか。

（詳しい事は生協組織部まで、内線七七六）



飛鳥井雅道著 ■ 幸徳秋水——直接行動論の源流

小林良彰

革命家かテロリストか

現代に通じる問題

合法主義と直接行動主義の論争は、革命運動の中でたえずくり返されてきた。もっとも古典的なものは、ナロードニキ、ニヒリスト、マルクス主義の間でおこなわれた。戦前日本における「アナ」と「ボル」の対立もそうである。今日の大学騒動における理論的対立が、具体的な表現こそちがうが、根本的思想において同じ性格をひめている。そして、幸徳秋水と片山潜の決裂も、現在の問題と大いに関係があるという立場から、著者は幸徳秋水をとりあげようとする。

「本書に書いたことは、つまり、幸徳秋水の投げかけた問題は、まさしく現在につきつけられている問題なのである。

幸徳が第二インターナショナルの堕落をめぐって、片山潜と徹底的に論争したことは、そのまま現在の世界共産主義運動の堕落と重なり、また、彼が議会主義へ投げかけた問題は、そのまま、世界をおおう直接民主主義への要求、大学闘争に重なってくるであろう」

そのような立場から幸徳秋水を取りあげようとするならば、当然今までの幸徳観からはなれなければならない。今までの幸徳観の主流は、著者のいうところによると、公認マルクス主義のがわからのもので、「テロ」「暗殺」「無政府主義」ときめつけられるにすぎなかった。たしかに戦後二十年間に書かれた戦前日本の革命運動史では、片山潜が一つの模範としてとりあげられ、これに対立する幸徳秋水は大衆運動から浮き上った極左分子という位置づけがなされていた。

しかし現代的関心が変化すれば、歴史観や強調するべきところも変る。既成左翼の合法主義にたいして批判が提起されてくると、その立場に立とうとする人のがわからは、片山潜よりは幸徳秋水にたいする同感が示されてくるのは当然だろう。そして、著者は、そのような発想法で、大学紛争の頂点を迎えた昭和四十四年六月にこの本を出版した。そこに、この本の現代的意味を見ることができる。

「幸徳研究者にはマルクス派が多いが、幸徳秋水グループも最後には『アナーキスト』と名のっていた。幸徳の罪名は『テロ』であり暗殺だった。今までの研究からもうひとつおよび腰な感じをうけるのは、私だけだろうか。デッチアゲだ、無実だとくりかえすのは、程度をこすとうそになる。幸徳は実際この蔭謀グループに接触はしていたからだ。マルクス主義とアナーキズムは、日本近代史で

は対立しすぎていた。ロシアの革命運動でも、この二つは相反するタテマエになっている。研究のおよび腰な感は、実はそこのところから発していたのである。

ちがう、と私は思えるようになった。幸徳グループはロシアの運動の影響を真正面からうけていたし、それを強調するのがこの新書の目的の一つだが、資料をすこしていねいに検討すれば、今までのように、日露戦争までの幸徳はプラスだが、その後は『心情的にエラク、方法はまちがった』といった評価では、彼の偉大さは説明できない。私はアナーキストではないが、日本の思想・文化を考えるとき、幸徳がはじめはすこしずつ、しだいに急速につっぱしって行った道は、勝ち目があったかどうかは別にして、いまだにわれわれの前に残っていると思う。現在は、既成左翼への反撥として、ますますアクチュアルになってきているだろう。」

こういう角度からすると、偶像化されていた片山潜の意外な側面が紹介されるようになる。

「片山は、ときどき編集のあいまにいったという。

『どうも組合がなければどうしてもダメだ。何としても組合をつくらなければならぬ』と。このことば自身は、本来なら幸徳秋水の夢想的直接行動論への批判として、もっともするどいものを含んでいたはずだ。しかし、片山はそのとき、つづけていうのである。

『組合をつくるためには、無尽組織にして三カ月位に籤を抽かせて、反物の一反ずつも当るようにしたらどんなものだろうね』

『週刊社会新聞』の編集部に、幸徳派の人間として入りこんでいた吉川守圀の反論をきこう。

『それはまちがいでしょう。われわれは革命が目的なんで無尽会社が目的ではない。ことに運動そのものが萎微窮迫しているこのばあいに、一反の反物につられてくるようなやつばらを集めてみたところで、それで革命ができますか』

片山は、つまって答える、『君はよく革命、革命というね』。吉川は反撃した、『あなたはよく無尽、無尽といいますね』」

しかし、革命的情勢の熟さない時期に、性急に革命を目指して行動するものには、孤立だけが待っている。弾圧、孤独、貧困の中で身を誤らないようにするのはむづかしい。妻を離縁した幸徳は、同志荒畑寒村の愛人管野スガと関係して、大杉栄や坂本清馬などの同志や後輩から「恥を知れ」とののしられる立場に立った。

その管野スガは、当局の弾圧にたいする報復として爆弾による天皇暗殺を主張してまわった。幸徳はこの方法にはじめから賛成であったのではない。むしろ直接行動の意味を大衆的武装闘争と理解し、個人的暗殺は古い手段だといっていたという。だが期待していた大衆運動はまったく起らない。彼の気持も動揺した。他方、管野スガは宮下大吉と相談して暗殺計画へ突走った。幸徳は心ならずもこれにまきこまれて破滅にすすんだという叙述である。

「二年先か、三年先か判らんけれど、もっと積極的かつ具体的な運動をやって行かなければならない。そのためには意志の強固な、そして熱心な闘士が必要であるから、地方を廻ってみたらどうか」

これが幸徳の本心であったが、宮下、管野が逮捕されると、政府は幸徳も天皇暗殺陰謀の積極的推進者だと断定し、大逆事件の首謀者にされてしまったという。このような幸徳の本心は、坂本清馬再審請求尋問調書や資料として利用しながら解釈されたものである。もし幸徳の本心がこのようなものだとするならば、幸徳は単なるテロリストでもなく、無政府主義者でもない。むしろ、本来の革命家としての素質を身につけていたが、時勢にめぐまれずに孤立し、迷いの中で過激な同志にまきこまれて身を誤った悲劇の人物ということになる。この点が読者の同感を呼ぶようになるのではなかろうか。

ただし、幸徳らに敵対していた政府についての解釈は奇妙な誤解を含んでいるように思われる。藩閥政府だけが弾圧の張本人だというような書き方である。そして、その藩閥政府をときに山県有朋、ときに桂太郎で代表させるだけであり、天皇、西園寺公望、原敬すらも、この勢力から疎外されていたかのように描いているが、こういう捉え方で政府の本質を紹介することが、果して幸徳らの反政府運動の意義を正確に解明することになるのだろうか。

それはともかく、歴史はくりかえす。一度目は悲劇として二度目は茶番劇としてといわれるが、直接行動を提起した大学紛争の退潮期にあたり、幸徳のたどった運命は現代を考えさせる上で大きな意味をもつだろう。

（中公新書・二五〇円）

（同志社大学）

筆者小林良彰氏は現在同志社大学講師で、著書には「フランス革命経済史研究」（ミネルヴァ）「現代革命の条件」（亜紀書房）、「市民革命」「明治維新の考え方」（三一書房）等があります。

金銅装冑の発掘

■ 古代の謎に挑む Ⅰ

綱干善教

■ わたしの研究ノート

（一）

諸君のなかには博物館やデパートで行なわれる古代文化の展覧会あるいは古代芸術に関する書籍・図録などで、この異様な冑を見たことがあるかも知れない。

学術上の型式分類からすれば一種の眉庇付冑であるが、他の同型式の眉庇は冑とはほとほど違った様相を示すものである。

ところでこの冑が学界に知られ、そしてこれをめぐって日本古代文化史上の重要な資料として注目されるようになった経過を述べよう。

昭和二十九年二月、私は奈良県五条市の向山丘陵で「埴輪円筒棺」を発掘調査したことがあった。当時埴輪円筒棺という特殊な埋葬施設の出土例は非常に少なかった。

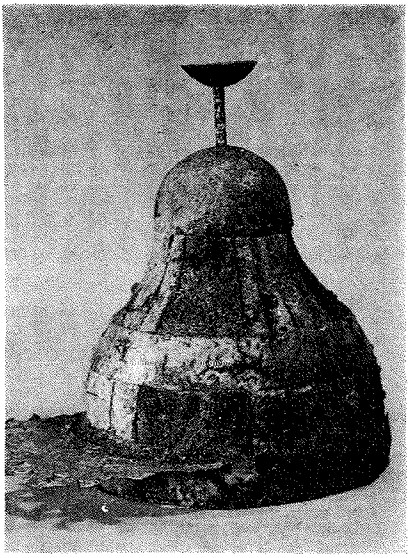
ところが昭和三十二年十月奈良市で開催された日本考古学協会に出席のため来亨された明治大学教授後藤守一博士は私が発掘した埴輪円筒棺の出土地を是非実見したいと本学の教授であった末永雅雄先生に依頼された。そこで末永先生から私に後藤先生を御案内するよう紹介されたので、同月二十九日現地まで同行した。その時山の中でたまたま出逢った村の人に「猫塚という古墳から最近金の冑が出たらしい。それが山の麓の家にある」という話を耳にした。半信半疑でとりあえず私一人山を降りてその家を尋ねたところ、床間の正面にこの冑を置き、その傍に、金銅の帯金具、鉄鏃など箱に入れて並べてあった。牧草を植えるために山を耕していたら変なものがでてきたので持帰ったという御主人の話。よくみると未知の資料がかなりある。驚いて山に上り後藤先生と共に再びその家を訪れとにかく応急のリストをつくった。生涯日本古墳の研究につくされた晩年の後藤先生もいまだこのような資料を見たことがないといわれるほどであった。私はそのことを早刻末永先生に御報告した。そしてこの出土品を一括して奈山県教育委員会で保管する手続をとった。

翌三十三年三月、再びこの猫塚古墳を発掘し、他に金銅の冑二口と埴製枕、鏡など貴重な遺物の出土があった。

（二）

この冑は詳しくいえば「鉄地金銅装四方白竪矧二段鋲留蒙古鉢形眉庇付冑」とも称すべきものである。

鉄の地金の表面を渡金し、正面、背面と左右両面の四方を金張りの小札その中間を鉄の小札で構成する。このような手法を「四方白」と呼ぶが、その小札が上下の二段になり、上の半円の伏鉢、中央の胴巻、下の腰巻とこの小札が鋲で留められ、正面には庇がつ



金銅荘蒙古針形眉庇付冑（奈良県猫塚古墳）

く。このような庇のついた冑を眉庇付冑と称している。またこの冑の本体の部分すなわち「鉢」の形が細く、高くつれらくている形式を「蒙古鉢形」と仮称したのである。ところで他に類例のない冑が出土したことは一体どのような意義があるのだろうか。

先ず第一に「金銅装四方白」という手法の眉庇付冑は従来福岡の月ノ岡古墳、堺の仁徳陵、淡輪の西小山陵古墳三重県の佐久米古墳、千葉県の祇園で出土した五例が挙げられるのみであるこのうち月ノ岡の冑は文化三年に発掘され破損がひどく、仁徳陵の冑は明治五年出土したが当時すぐ埋めもどされ今はただ記録だけになっている。西小山陵の冑は不幸盗難に遭い所在不明、佐久米の冑は海外流出して現在メトロポリタン博物館で所蔵されている。このように僅か五例しか出土がなく、現に殆んど見ることのできないこの型式の冑が猫塚古墳で三口も出土したことは全く驚異のできごとであった。

第二に蒙古鉢形という特殊な形式の冑である。かって末永雅雄先生が「日本上代の甲冑」の高著のなかで「特殊形式の冑」として和歌山県有田市淑浜から出土した一例にこの名称をつけられた。この稀少な型式の冑が完全な姿で出土したのである。

第三に恐らくこの猫塚の冑は大陸の至半島から輸入したものと考えられる。しかも多量の鉄製品と共に鍛冶道具（鎚、やっとこ、かなとこ）が出土した。五世紀の中頃の紀の川の流域で、しかも半島から多量の鉄製品を輸入できる豪族、それは恐らく紀氏一族ではなかろうか。

五世紀代における紀氏の勢力、日本と大陸・半島との関係、大陸・半島との文化交流てうした問題を研究する上でこの冑の資料的価値は非常に高いものである。

私がこの冑をはじめて農家の床間に置いてあるのを見て如何に驚いたか。すでに十数年は過ぎたが、その感激は今も脳裡に焼きつけられている。

（文学部助教授）

死への郷愁 □手記

小田原修次

Ⅰ

『閨房の淫楽』を、ふっと脳裡に感じさせるように、なにか魔性に魅せられ、いつしか、死への郷愁を抱いて歳月の流れること久しからずの私ですが、その中味を探ることによって、唯美主義的な『生（Leben）』の形象を浮き彫りできればと思っております。

Ⅱ

晩秋の夕暮れ、ススキの白穂が寒風に散り、飛び行くさまをみて心を震わし、且つまた、夕闇せまる一家団欒の頃、遠くの窓より漏れ来る薄淡いオレンジ幸色を眺めて、『お母ちゃん…。』と呟き、視線をそらし、目を瞑り、走り出した私…。私の走るうしろから、『オ・カ・ア・チャーン』ということばだけが、木霊のように、追っかけて来ました。それが18・19の頃でした。その頃、人生の意味目的性というものがすべて崩れ去り、『息をしているという事実』におぶさってかろうじて、『生命の持続』を保っているという状態でした。哲学、人生論の類の書物を、ものに憑かれたように、読み漁りましたが、『ことば』だけが空しく『自分』を、嘲笑っていました。

Ⅲ

20になって、恋をし『恋のよろこび』の中に埋没することによって、『生き甲斐』を見い出し感性的な情緒不安から逃げ出しました。処がそのよろこびを破壊したい欲望に駆られ恋の世界に遊戯をくり広げたのも束の間の夢となり、恋の世界で『生きる積極性を満喫する』と、生き甲斐の対象が、個人的レベルから社会的なレベルへと昇華し始めました。それに伴って、これらから『死』の問題に付

いて概述する処のものは、最早、単なる『生き甲斐』の領域で、捉え切れない部分をも孕み出し、質的変化を来たしてることを、誤解のないように、蛇足ながら、付け加えておきます。

Ⅳ

積極的に生き抜く志向を有しつつ生（Leben）の最大極限の燃焼爆発の型態に齎らされる処の『死』―熾烈な革命運動を展開し敵銃弾に倒れとの『死』の類―は、自虐的な私の心の片隅で、『死の快楽』を囁き始めるのです。それは、恰も性交の対象が革命であるように……。そのような囁きを、あるいはゲバルトの響きの中にあるいはパンフの刷れる音の中に、甘く、楽しく、聞きながら、『死への郷愁』は、私の脳裡の一部を、『占拠』するのです。

Ⅴ

愛し愛される《親・友・兄（姉）弟（妹）・師……》の絆が、強く私の心を捉えているが故に、（Ⅲ）の状態で、自殺することを不可ならしめたのですが（Ⅳ）の状態にても脳裡の根源的部分は、『生（Leben）への渇望』が、依然として、『支配管理』を続けているようであります。生への愛着―死に切れないこと―と、死への郷愁とのアポリアが、まぎれもなく、唯美の世界を、形成して行くようです。それは、このアポリアが、解決される唯一の端緒なのでもありましょう。

Ⅵ

扨て、ここまで、粗雑に、筆を、進めて来ましたので、部分部分、核心に焦点をあててみることにしましょう。それは死への旅への『チケット』と、なるかも知れません…。一般に、命の活動性が衰えてくれば、それは、自然と、虚無的人間に、化し行き、ニヒリスチックに、死の世界に憧憬を、抱いて行くこともありまたそうでなくとも漲る青春のエネルギーをもっていながら、『社会的に』生きる意義を模索し、悩み『不可解』の皮肉的言辞が、発せられるに至って始めて味わう、死の憧憬もあります。個人一人の無力感に、叩きのめされた処を、出発点とし、社会的矛盾の渦中に、ありながら、偽瞞的に、『俺は仏の慈悲、神の愛を、この世に、顕現せしめる方向に、生かされてる。』と、共存主体なる概念を、『人類愛』の化体者である如く思弁して、『階級』を乗り越えたもの、とし、自己満足を味わう処に虚構があり、現実に生起する階級的苦悩を味って、『虚構』の叩き潰されるのは、時間の問題であったようです。この自己崩潰の直接的契機は、『失恋』でありました。一般的に愛すら、階級的制約を、強いられているようです。その頃が、（Ⅱ）の部分ですが、（Ⅲ）の状態で、『死』の世界へと自己を投棄したとしても、それは、まさしく投棄以外のなにものでもないのでしょうか？。（Ⅲ）の部分で、『生きる積極性』を満喫してと、ありますが、それは、人生の積極的・肯定的・意味を、見い出して・ではないようです。問題は、（Ⅳ）です。『死』は、一般的に、快楽でありえないのですが、時に、死は、禁断の実の最高部類に、属することがあるのです。ヴェールに包み隠された、豊満な肉体をもつ悪女に似て、貪り始めたが最後、誘惑に駆られての衝動は、『肉体的交り』を、果すまで、決して、消え去ろうと、致しません。苦悩が、煮えつまると、『快楽』へと変身を遂げるようです。死への契機を、生（Leben）の内に孕みつつ、即ち、死を覚悟し、命を賭けて、人民解放闘争に、自己を、アンガージュ（投企）するとき、最大極限の『美』が、創出されるで、ありましょう。人生は、芸術であり、美が芸術の至上価値であって、人生に美意識を抱くことにより、自己の生（Leben）に、安らぎを、覚えるものです。現代の状況に於て、人民解放闘争の戦列から、身を引くことは、怯懦な醜汚のなにものでもなく、そこに、真の安らぎは、微塵も存在しないものであるもとを、賢明なる読者諸志は、熟知しておられることでありましょう。美は、純粋性の結晶であり、真なるもの聖なるもの善なるものを、要求しております。

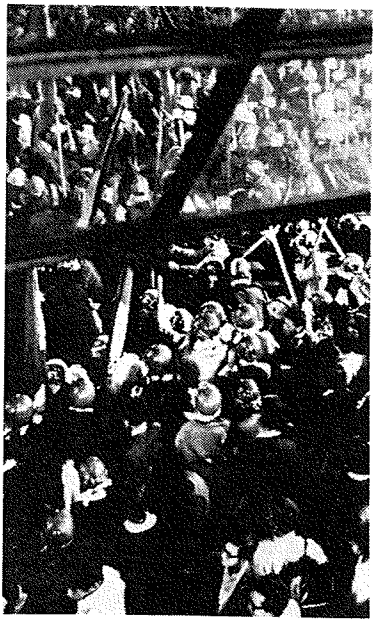
―人生はローソクの如きものであり、
燃えることによって輝く―

昭和四十五年三月

世紀転換期のドイツ・マルクス主義

―ベルンシュタイン思想の再検討―

■久松俊一



（この原稿は、他の思想誌掲載の予定であつたが、思想誌は休刊となつて、その後我々の手許にあつた、原稿は字句修正、補筆なしで執筆当時のまま書評本誌に掲載します。
尚筆者は当時経済学部助手であつたが、今年二月、経済学部教授会の名において退職決定が報じられた）

I

エドゥアルト・ベルンシュタイン―ドイツ社会民主党員、銀行員。一八九〇年頃から修正主義の立場を明らかにし、エンゲルス死後は公然とマルクス主義を目和見主義につくりかえる活動を行ない、第一次大戦中は帝国主義ブルジョアジーに協力して戦争を支持した。

ここに、公式のマルクス主義者によるベルンシュタイン批判の集約点がある。大戦中のかれの態度について、事実を歪めていることはここでは問わない。むしろ問題は、修正主義とか目和見主義とかが直接に前提されており、たんなる断罪に終わってしまっている点にある。批判が批判とはなっていない。本来、マルクス主義的批判とは、批判対象、存立する条件を明らかにし、その根拠を批判するものであって、たんにイデオロギー批判にとどまることはできないものである。だが、そうした条件とはまさしく階級闘争の主体的＝客体的危機に外ならない。それを明らかにすることは自らの弱さを明らかにし、それを克服する道を指し示すことなのであって、だからマルクス主義的批判は自己批判でなければならないのである。われわれがベルンシュタインを再検討する場合、こうした批判を原則とするものであって、それ以外ではありえない。

だが何故に、すでに過去のものとなり歴史によって破産を宣せられたかに見え

るベルンシュタインの思想を、今われわれが再検討しなければならないのか。社会主義運動史上の一変種を発掘するという骨董屋的関心からではもちろんない。そうではなくて、ベルンシュタインあるいは修正主義として現象しているものは、運動そのものの自己疎外の外化形態に外ならないという認識からである。

だからベルンシュタイン批判は運動の疎外を克服する論理を明らかにするものでなければならない。にも拘らず、これまでの公式的批判はたんなる断罪でしかなかったが故に、つまり現象を現象として批判するにとどまってきたが故に、修正主義をたえず自ら再生産してきたのである。ルカーチも言うごとく、こうした断罪は、マルクス主義的討論の真に原則的な高さに達することもできないし、具体的＝実践的な行動の契機において必要な、戦術的＝組織的な結論をひきだすこともできないのである。このように、ベルンシュタインをマルクス主義思想と運動の展開のなかに論理的に位置づけることができず再び運動そのものの疎外を許しているところにこそ、現代マルクス主義の理論的混迷の因がある。ベルンシュタインあるいは修正主義の検討が、現在のわれわれの当面する課題を顕示するための不可欠の迂回路である所以である。

以上のような問題意識に支えられて、かつてわたしは、ベルンシュタイン修正主義をその形成過程において内在的に把握しようと試みたことがある。この小論ではその成果をふまえて、まずベルンシュタインが何と、どのように、対決したのかを簡単に跡づけ、次に、かれの客観的諸条件の分析と主体的条件の分析へに問題を限定して、その社会主義運動のわれわれにとっての意義と問題性を明らかにしてみたい。

Ⅱ

一八九〇年代のベルンシュタイン修正主義の形成過程は苦渋に満ちたものであった。というのも、一八七八―九〇年のビスマルクの社会主義者鎮圧法下、亡命生活を強いられていたかれは一貫して急進的党指導者の一人であったし、カウツキーとならび、あるいはそれ以上にエンゲルスの信頼を受けていたからである。その間の事情は、のちに書かれたかれの自伝に詳しいが、その苦悩にみちた自己批判、ドイツ社会民主党（SPD）批判、さらにマルクス主義批判の動機は、一言でいえば、社会主義運動が転換期に立っているという危機意識、あるいは運動の危機の認識であったと言えよう。もちろん、かれの認識がどのような深みにまで到達しているか、また危機打開のための方法がいかなるものか、が問題になる。だがその意義と限界を明らかにし、そこから学びうるためにも、かれの対決しょうとしたもの、対決の仕方を知る必要がある。

一八九〇年、ビスマルク体制が崩壊し、一二年間の非合法活動から解放されて公然と合法の舞台に姿を現わしたSPDは、選挙得票数に示される大衆の支持において、組織性において、他に例を見ない大きさを誇った。「ドイツの社会民主主義的労働者は勝利をかちとったばかりである。かれらの頑強な不屈さ、鉄の規律、闘争の中での快活さ、不撓不屈さは、まさにこの勝利に価するものであったが、しかもそれは、かれら自身も予期しなかったところであり、全世界を驚かせたものであった。改選のたびに、社会民主党への投票は、自然過程のもつ不可抗力をもって増加した。」というエンゲルスの言葉が、当時の党員の実感を代弁している。

鎮圧法下にあって訓練された党、組織的統制と規律をもった党、大衆的基盤に立った党―たしかにこれは社会主義運動史上はじめての事柄であり、はじめての経験であった。この事態に、終始急進派を標榜してきたW・リープクネヒト、ベーベルら指導部はどのように対処したのか。かれらは成功のなかに成功しか見ず、成功と見える運動の直面している困難には無自覚であった。事実、はやくも九一年には、運動のもつ困難性が、反議会主義、反官僚主義を唱える都市下部党員の反抗（いわゆる「青年派（ユンゲン）」）と、南部ドイツでの実践をふまえて改良運動を叫ぶフォルマールらの反抗として、現象してきている。この左右両翼からの指導部批判は、それ自体新しい事態に直接的・対応しょうとするものである限りにおいて一面的な批判であったが、そうした形をとって現われることに運動そのものの当面する困難性が潜んでいたのである。その困難とは、ブルジョア支配体制を変革し、かつ新たな社会を建設すべき担い手は誰か、という問題を、具体的な戦略・戦術との関係から明確にすることが焦眉の課題となりながら、なおまだそこに現実的＝理論的に答えきれてない点にはっきりと表われている。

プロレタリアのみならず非プロレタリアも含めて広範な大衆が政治世界に登場してきたなかで、階級闘争における諸階級・諸階層との同盟問題、党指導と大衆運動との関係、が理論的に明らかにされ、さらに、こうした問題を問題として成立させている政治的・経済的な構造変化が認識されなければ、この困難を克服することはできない。九〇年代のドイツ階級闘争の巨大な進展とは、たんにビスマルク打倒、SPDの組織拡大といった現象にあるのではなく。運動がより困難な、高次な問題に当面し、そこに内在する矛盾をとりだし、分化し、展開させうる客観的可能性をもったことにこそある。「ユンゲン」の反議会主義・反官僚

主義というスローガンにしろ、フォルマールの南部農民に立脚した改良主義のスローガンにしろ、その意味を一段掘下げてみれば、都市労働者と農民の関係、党指導の本質、に対する一面的ではあれ真剣な問いかけではなかっただろうか。自然成長的意識に基づき、その限りでは転倒した形しかとりえなかった、こうした問いかけのなかに、問題の所在は示されていたのである。まさしく運動はその質的転回を要求していたのである。

指導部批判という形態をとって現象しながら、運動そのものが質的転回を要求していたにも拘らず、党指導部、とりわけ党の理論的支柱たるカウツキーには、それが見えなかった。指導部は、無名の急進的下部党員からなる「ユンゲン」を粉砕し、他方実績をもったフォルマールとは妥協をはかった。このような党内問題への対処の仕方にも拘らず、かれらはマルクス『資本論』の分析に全面的に依存することによって、正統なマルクス主義継承者をもって任じていたのである。とりわけ「エルフルト綱領」（九一年）第一部の起草者カウツキーは、その綱領解説の序文で、「綱領の総論も、『資本論』中のあの有名な『資本主義的蓄積の歴史的傾向』の項をわかりやすく書きかえたにすぎない」ことを自ら告白し、かれの言うマルクス主義がマルクスからの引用と解釈を旨とする教条主義に外ならないことを暴露しているのである。豊かな現実そのものの深みに分け入るのではなくて、現実をマルクスの理論の例証とするのである。ベルンシュタインがまず攻撃したのは、「すぐれて科学的な理論成果を教条的に受け取って、しかも現実のなかから都合のいい事実を寄せ集めて、あたかも確証されたかのようにふるまう」こうした思考態度に対してであった。こうした安易な理論方法と組織の自然成長にもたれかかっているところに、党の危機があることを警告したのである。

ではかれの認識した党の危機的構造とはいかなるものか。図式的に言えばこうである。資本主義経済体制の生命力が衰亡し、全面的経済恐慌が切迫している一方で、窮乏せる労働者と富を集中せる資本家への二階級分解が進行して階級対立が尖鋭化する。早晩勃発する大経済恐慌が、すべてを包括する社会的危機にまで拡大し、その危機の中から唯一目的意識をもったプロレタリアートの政治支配とその下での社会変革が生み出される。従って党は、その日のために非妥協的に労働者の立場を守り、かれらを啓蒙し、組織成長を計らねばならないというのである。換言すれば、ますますドグマ化したマルクス主義を保持し、現実から切り離され、静観的態度をとることによって、組織の自然成長を可能にするといった、いわば〈待機主義〉とでもいったメカニズムが成立しているのである。それが組織メカニズムになってしまっている点にこそ、深刻な党の危機がある。ベルンシュタインが対決したのはこのメカニズムとであり、現実のあるがままの〈事実〉をこれに対置して、このメカニズムの連鎖を断ち切ろうとしたのである。

Ⅲ

「マルクス主義は、教条ではなくて行動の指針である。これを見失なうと、われわれはマルクス主義を一面的な、かたわの、死んだものにしてしまう」というレーニンの言葉をまつまでもなく、ベルンシュタインの出発点もここにあった。そこでは、かれはここからどのようにして船を漕ぎ出すのか。

前節で明らかにしたように、SPD指導部は、革命的空語と化した教条理論に安易に依存して、自ら非実践的な静観主義に閉じ込もって組織成長をはかり、ひたすら破局を待ちうけることにより、運動そのものの逢着している困難性に無自覚となり、運動そのものの要請に答える術を知らなかったのであるが、これに対するベルンシュタインの批判は、まず自覚的に〈事実〉を対置することによって、この困難を見定めようとするものであった。ベルンシュタインは言う—「社会民主党自身、はたして今すぐ大破局がおこるとして、それを願うべき実践的態勢がととのっているというのか」。否である。現実には党はすでに体制内化し、「資本主義の息の根をとめるどころか、資本主義なしには存在しえなくなっており、他方、といって資本主義の諸機能を充たすのに必要な安全性を保証できる」ほどには、体制べったりでもない。体制内化した反体制政党といった矛盾にみちた姿こそ、現実の党の姿なのである。とすれば、今なお教条理論にしがみついた党は、この矛盾のなかで「精根尽き果て、結局は完全に敗北してしまう」ことになるだろう、と。このSPDの危機を生み出した現実の主体的・客体的な質的変化を認識することが、そしてそこに現われた運動の固有の困難を解明することが、何よりも第一の前提であることをかれは主張する。「誤まった希望をつちかい、誤まった道へと誘なう欺瞞を維持するよりか、苦い失望の方がよほど良い。……真理は、われわれに解決できる課題に全力を投入することを教えてくれる。そして、それはまだ解決の前提条件にさえ達していないのに、解決の完成が切迫しているかのように夢みることから、われわれを護ってくれる。」—ここに、党指導部よりも一歩すすんで、ベルンシュタインの運動の困難性への自覚をみることができるが、と同時にかれの批判の一面性・限界をも予想することができる。

後の問題については次節に譲り、とりあえず本節ではかれの認識をみてみよう。

ベルンシュタインが指摘する〈事実〉は、ほぼ次の三点に関する分析であるといえる。つまり、資本主義発展によって生じた経済過程の形態変化、それに伴なう階級関係の変化、そして最後に変革の場たる社会の変質、これである。

まず第一の点について。産業の発展は、たしかに「一方ではそれまで小営業に特有だった経営が大工業に吸収・打倒される」という過程を進行させ、生産の集積・集中を貫徹させているが、同時に「他方では、大工業が産み出す新しい技術や新しい状況にのっかって、新たな中経営が形成され、……こうしてたえず産業種類が増大する」という現象も生まれてきている。後者、つまり経済過程の多様化・複雑化は、近代信用の拡大、交通網の拡大と相まって恐慌勃発のきっかけを排除ないしは弱化させる調整機能を持つものであり、前者、つまり大工業の成長は、カルテル・トラストといった企業家組織を発達させ、自らの姿態をかえることによって、〈適応能力〉を増大させている。要するに、こうした事実が明らかにしているのは、カウツーキらの言う如き資本主義経済の自動崩壊・破局切迫ということではなくて、逆に近代資本主義の生命力の強靱さであり、その柔軟な適応能力である、というのである。

第二に、階級関係の変化について。産業社会の複雑化・多様化に伴い、階級関係も複雑になり、大資本家・地主対プロレタリアートという単純化に反する結果を示してくる。ここでかれの労働者階級観をみると、①農民層の存続、経済諸関係の多様化の結果、プロレタリアは住民の少数者となっていること、②産業種類の多様化・経営規模の多層化によって、プロレタリアの階層分化が進んでいること、③プロレタリア自身、国富増大の利益に与かりうること―こうして、プロレタリアートは、単一の階級意識をもつものではなく、従って、もはや階級として社会から疎外されているものではなくなっているのである。階級関係の変化、とりわけ変革の主体たるべき労働者の社会内化・体制内化という現実をベルンシュタインは鋭く自覚していたといえよう。だからここから、労働者自身の組織たる労働組合も、「直接的には、ブルジョア経済体制の内部で、プロレタリア部分の特殊利害を代表し」、経済闘争に投入することにより自己展開するところの、本質的には日和見主義的な組織である、という認識が生ずるのである。

最後に、以上の現状把握に基づいて、社会主義へ至るための戦略・戦術を立てるうえでの要とも言うべき〈社会〉の変質が分析される。そこに把えられた社会像は、一言で言えば、民族国家の枠内で、経済発展と階級の階層化に根拠づけられて、ますます多様化する経済生活と一面化・抽象化する政治生活の総体としての姿である。すなわち、現存社会は、たしかに経済過程の社会化、大衆の政治的権利の拡大によって、社会主義への進歩を示しつつあるのだが、同時に、技術進歩による生産施設の巨大化＝場所的固定化が、住民数を増大させ、かつ場所的に集中させ、経済活動全体の展開が職業生活を多様にし、こうして必然的に行政官庁の役割の拡大と分化を推進する結果、住民大衆による社会の民主主義的自己組織化が阻害され、あらゆる政治機能が国家の官僚機構に代位され、社会成員にとっては社会及びその組織が不可知のものとなっていく過程が進行するのである。国家が〈社会化された国家〉になるにつれて、社会の内実が空洞化し、社会存立の基盤たる住民大衆の連帯意識と行政体に対する自己決定権が低下せざるをえない。経済生活（生産と消費）を貫く多様化・原理、その裏返しとしての政治生活における個別化・原理＝世紀末に生み出された諸現象は行政体としての国家の社会への浸透、階級の解体を示しているとベルンシュタインには映ったのである。

見られる通り、ベルンシュタインは〈事実認識〉を梃子にして、世紀末の資本主義世界の生み出した変化を分析しようとしたのであった。かれ、繰返し主張したようにそれは単なる事実の確認でしかなく、事実という現象世界のものである限り、偶然的かつ直接的な現実性にしかすぎず、ヘーゲル的に言えば自己のうちで分裂した有限な現実性にすぎないが、同時にそれはそのようなものとしてあるかぎりにおいて他のものの可能性でもある〈条件〉なのである。ベルンシュタインの指示した諸事実は、まさしく運動そのものの客観的＝主体的＝場所的な条件なのであり、運動がそれを媒介にしなければ内実を展開しえない〈条件群〉なのである。そしてそれが開示した世界は、自己のうちで分裂し、錯綜し、無限の豊かさがこの上なき浅薄さとからまりあった現実である。社会主義運動の直面した困難性は、これら直接的・偶然的な現実をいかに止揚し、新しい現実を出現させることができるかという点にこそあった。

Ⅳ

すでにわれわれには周知のことだが、資本主義は一九世紀後半から帝国主義段階に突入していた。ドイツにおいては、八四年の植民地創設を起点として帝国主義的膨張が展開するのであるが、すでにそれより以前、七三年恐慌後のカルテル形成とカルテル保護関税を武器とするダンピング政策によって、イギリスの工業独占に肉迫しつつあった。八〇年代、ビスマルクの「穀物と鉄」のための保護関

税によりユンカーと工業家との体制側の同盟が計られ、以後飛躍的な経済発展が帝国主義諸列強との関税競争・植民地争奪戦を通じて行なわれ、一方それに対応すべき国内体制の整備が、ユンカーと工業家との分離と結合を経糸に、労働者対策を緯糸にして展開されていったのである。世紀転換期の「結集政策」へと結実していくドイツ帝国主義政策の展開は、ユンカーと工業家との結合を軸に、国内の諸階級・諸階層を体制内に匂摂し再編しつつ、世界分割闘争を激化させていったのである。

ドイツ資本主義のこうした構造変化が生みだす諸現象に鋭く反応したのがベルンシュタインであり、前節で見てきたかれの三つの分析は、なによりもこのことを示しているのである。資本主義経済の適応可能性（客観分析）、階級関係の変化（主体分析）、および社会と国家の変質（場の分析）―これらの分析は、運動のふまえるべき〈諸条件〉を明らかにしている。「今、何をなすべきか」、そして「それは目標へ至る過程のどこに位置づけられるのか」という変革の戦略・戦術は、つねに現にあるがままの〈事実〉に立脚しなければならないというのが、ベルンシュタインの確信であった。この事実認識とは、外ならぬ実践の条件の認識であって、資本主義崩壊の不可避性というきわめて機械的に理解された〈客観法則〉に依存して、運動そのものの展開を阻害しているSPD指導部の欠陥を見事に衝いたものと言わざるをえない。その時点において、運動をもっとも正確に、あらゆる主観的願望を排して客観的に把えること、いいかえれば運動の〈自己認識〉が、第一の原則でなければならない。だが、ここには二つの困難がある。一つは、帝国主義時代への突入と共に、真の変革主体（プロレタリア階級）は分裂させられ、一層疎外され、〈物言わぬ大衆〉に転化し、従って自らの主体性を党へと外化することによってそれを克服しょうとするのであるが、一たび形成せられた党は、自らの存立根拠たる階級へと反省することなく、ブルジョアジーの攻撃に対する先兵として階級闘争の全線にわたって、階級の主体性を代行するに至ることから生じる困難である。ここでは、党と大衆との有機的関係が断たれ、党は官僚化し、単なる宣伝の党へと転落せざるをえない。それはいかに組織的に肥大化しても、もはや闘う組織ではありえない。いかに急進的な言辞を弄し、現に闘争を行なっていても、階級の主体性を代行し、その意味でブルジョア政治の枠内にからめとられている限りにおいて、真の闘う組織ではありえない。SPDはまさしくこの困難性に躓いた党であった。それはおよそ正確な自己認識、従って自己を否定する契機を持たぬ党であったと言えよう。だが第二に、より大きな困難は、この〈自己認識〉という原則をふまえたところに生ずる困難である。ここでは自己認識の〈質〉が問題である。たしかに事実を認識し、運動のおかれた諸条件を明らかにし、運動をその条件に立脚しもたのとさせることが試みられる。だがそれは「何にむかっての条件か」が問題であり、従ってそれは未来（目標）から照射されたものでなければならない。結論的に言えば、ベルンシュタインは党の〈教条理論〉と〈待機主義〉に直接に反発することによって、事実を固定し、〈条件そのものの生成〉の可能性を否定してしまったのである。かれの理論の欠陥は、公式的に断罪される場合に言われるような、かれの分析内容そのものにあるのでもなければ、かれの改良主義そのものにあるのでもない。そうではなくて、その根底にあるかれの方法そのものに欠陥があるのである。すなわち―①その認識された事実が固定された条件群となっていること、と同時に、②その諸条件の相互連関が統一的に把握されておらず、従ってそれぞれが同等の権利をもって並列されることによって、その中心的条件が明らかにならないこと③このため、条件の生成が把えられず、従って歴史を生成として把える論理を欠落させていること、④認識主体と実践主体を裁断し、認識主体を非歴史的・抽象的普遍的人格として設定し、これとは完全に切り離された実践主体を階級の中に求めたこと、⑤しかも運動をあくまで〈下からの〉、自然発生的な大衆に依拠しようとすることによって、運動の主体と〈理論〉とはあくまで外的関係にとどまり、それは受動的なままにとどまらざるをえないこと、である。こうしたことの結果、ベルンシュタインにあっては、階級が自らを形成していくという論理が失われざるをえない。かれはあるがままの労働者大衆に依拠することによって党と大衆との硬直した関係を破り、党機能を活性化させようとしたのだが、労働者大衆自体は単に党から疎外されているだけでなく、帝国主義的社会再編成の中で、自己自身の本質からも疎外されているのであり、それとの〈直接的結合〉の試みは、理論的にも実践的にも破産せざるをえない。実際、かれの構想した反ブルジョア・反ユンカーの統一戦線は、むしろ第一次大戦へとむかう過程で、支配体制の〈結集政策〉に包括されていったのであった。以上見てきたように、ベルンシュタインは、変革運動における原則の根底に触れる地点で、結局はその困難に躓いたのであった。だが、それが原則的問題であるが故に、ベルンシュタインの誤まりは普遍性をもち、現代においてもなお再生産される誤まりなのである。

（一九六八・七執筆）

滝村隆一著■革命とコンミューン

林　一

マルクス主義を物化

分析的方法に限界も

確かに、現在的に「地域コンミューン」、「地区ソヴィエト」といった空想的なことばがはねかえりそうな状況があった。現代世界の構造を摘確に観透することができず、そうした構造との対決をやめ、一体何を粉砕。打倒しょうとするのかということの混乱したことの結果として、無媒介に、即事的に〈権力〉を対置したときに起るのだろう。それが、社会的内実として獲ちとられるものとして語られるのなら問題は少々異なるが。

しかしながら、それは、現代のグローバルに展開される国家・行政諸機関―交通網、マスメディア、官庁、治安機構（公安委員会・警察・軍隊）等を見ればあきらかなように、ユートピアにすぎない。そして、それは単にそうした実体的な社会の構造ばかりでなく、また地縁的な「場」の問題でもなく、「国家」の本質は幻想であると規程される領域の問題である。

最近、国家＝幻想といういい方は、ある程度、日常識化された感がある。しかし、それを具体的に、権力論の問題、政治斗争の問題として展開したところに、滝村隆一「革命とコンミューン」の意義がある。つまり、権力を手足のようにして社会の構造をその本質的なところで規程しているのは、法制的イデオロギーであり、それはまた、社会に生きて動いている人間の意識と、その意識を生みだす母体である生きた社会そのものに規程されているという構造を促え、戦略的視座ともいうべきものまで提出しょうとして書かれたものということができるだろう

そして、それは「〈学生権力〉〈日己力〉〈自主管理〉〈二重権力〉〈直接民主主義〉などといったスローガンに示される権力上の問題提起」に対して、直接的に批判を試みようとするものである。（P二九九）

しかし、それがそうしたスローガンとして提出されざるを得ない根拠まで見透せているか、どうかはいささか擬問なのであるが日本のマルクス主義が、輸入的、ロシア的マルクス主義であり、久しくスターリニズムの枠の中での様々の相違を程していたにすぎないとする滝村氏はそれはレーニンにも至る問題であるとする。例えば滝村氏は、レーニンの「国

家と革命」が〈プロレタリア独裁〉論に関して力説しており、それは「レーニンが共産主義的経済組織の創出とともに〈国家の死滅〉の問題を提起するときには、両者を明確に区別しつつ、何よりもすでに〈形成〉され現存すべき強固なプロレタリアートの中央集権的〈政治権力〉を、いかにして〈死滅〉させるかという問題に焦点をあわせて、〈経済的基礎〉との関連を追求すべきだったといってよい。この場合には、〈政治〉レヴェルにおける〈コンミューン〉的原則の適用の問題と、〈社会＝経済〉レヴェルでのそれとを、少なくとも理論的には混同してはならなかった」がレーニンは「新たに定立された〈政治権力〉としての〈プロ独裁〉を実質的には経済権力の有機的かつ中央集権的な Macht として把握し」「〈政治国家〉であるべきはずの〈プロ独裁〉がもはや完全に社会的・経済的国家〉としてのプロレタリア的な中央集権的経済体制に解消」しており、「正しい意志論と権力論の欠落の故にもたらされた、レーニンの経済主義的発想」であるとする。

そして一つには意志論に立脚した正しい権力論が必要であること。

第二に〈経済権力〉と〈政治権力〉の区別と連関を正しく促えることの必要性が指摘されている。

国家・権力の問題は、自然過程、経済過程の直接的な反映では決してない。それが、長期的な時間的には、対応しているとしても、しかしながら、それ自体、個別性、無政府性をもっている。経済社会を逆に〈包括し〉、制約する構造をもつのである。それはかつての労農派と構座派との「日本資本主義論争」における明治維新の規程の問題でも、あれやこれやの現状の分析にとどまり、正しく社会の構造をとらえることができなかったのであり、また、神山・志賀論争においても「絶対主義」を焦点とした論争としてあらわれ、そして最近の津田道夫の著作という日本のマルクス主義の政治思想の系図でも、その要でありながら、正しく促えられなかった〈国家〉の問題は、たとえば、マルクスが「ユダヤ人問題によせて」で「完成した政治的国家は、その本質上、人間の類的生活であって、彼の物質生活に対立している。この利」的な生活のいっさいの諸前提は、国家の領域の外に、市民社会の中に、しかも市民社会の特性として存続している。

政治的国家が真に発達をとげたところでは、人間は、ただ思考や意識においてばかりでなく、現実において、生活において、天上と地上との二重の生活を営む。すなわち、一つは政治的共同体における生活であり、そのなかで人間は自分で自分を共同的存在だとおもっている。もう一つは、市民社会における生活であって、そのなかでは人間は私人として活動し、他人を手段とみなし、自分自身をも手段にまで下落させて、ほかの勢力の玩弄物となっている。政治的国家は市民社会にたいして、ちょうど、天上が地上に対するのと同じように、精神主義的に臨む。政治的国家は市民社会に対して、宗教が俗界の偏狭に対立しそれを克服するのと同じように対立し、同じ仕方で克服する。」と述べた意味での世界の二重性をはっきりと把握できていなかった、土台の分析であるなら、土台の分析が逆にどこまで総体的な視点に絶え得るかということの検証がなかったのだとも言い得る。物質過程の解明が、それだけでは、天皇制等の問題がこぼれ落ちてしまったのである。そうした問題に答えようとしたのが神山茂夫であった（天皇制の諸問題など）。そうした左翼インテリゲンティアの系図からは、最近では津田道夫の労作があげられる。しかしながら、階級意志を階級利害と直接的に対応さす欠定的欠陥の指摘と、国家が市民社会に相対的独自性をもってあらわれるが故に（滝村氏は第三権力という言葉を使う）権力をもって〈普遍的〉な様相を程するのであるという滝村氏の指摘は鋭い。

しかし、先づ気懸りなのは滝村氏が、第一部において述べていく経過は、様々な学説、理論を紹介しながら、全て「〈政治革命〉と〈社会革命〉の区別していない。」故に○○的サンジカリストであると断罪されていっている点である。

アナルカ、サンジカリズムから、グラシ、ムローザ・ルクセンブルク、等々の様々な論説をあげ、あるいは、全共闘運動の最盛時に主として構改派の潮流から提出された様々の混乱の産物としての言辞に対して、「サンジカリズムである。」あるいは「サンジカリズム的発想である。」と切り捨てられる。こうした批判の方法は二とおりの意味で不満である。ひとつは、どういう理論が実際に現実を切り開いて来ているのかということに対する認識の問題としてあり、同時に、もともとのサンジカリズムにしても、サンジカリズム的傾向であると切りすてられたものにしても、そのもの自体が持つ意味の問題である。

マルクスは、階級の場棄から消滅に至る過程にはプロレタリア独裁という形態をとると確かに言っており、それは確かに「政治の先行」を意味する。

しかし、そうであるからといって、ベ平連的組織の拡大と、前衛という名の、啓蒙的集団とが組織論として運動論として対置されるといささか興ざめである。

著者は、マルクス主義理論戦線の低水準を克服し、トータルな視点を獲得せんと言う。しかしながら、ローザ批判、藤本批判、その他様々な論説、あるいは日

本のもっとも先行的な運動の評価について述べる時、「〈政治〉がないから駄目だ」と切り捨てる方法は、たとえば、ローザが、「マッセンストライク」を論じた時のその社会的・歴史的・政治的諸条件から、そう言わなければならなかった根拠そのものと対決する、そうした総体的な批判になり得ていず、あたかも、言辞に対して、言辞でもって対決した青年ヘーゲル派の裏返しの方法ではないのだろうか。ある領域から、他の領域をあっかった問題に対して、欠けている点をあげつらう方法でしかないのは何故か。欠陥なら、欠陥として、そうした欠陥を現象させざるを得なかった根拠との対決こそがマルクスの方法であるはずではないのか。

藤本氏が執拗なまでに、プロレタリアートの内的矛盾の分化と展開の問題を展開して来たことは、プロレタリア独裁へ至る道の（あるいはプロレタリア独裁以降も、しかし、とりわけプロレタリア独裁へ至る過程の）プロレタリアートの階級形成の問題の革命主体がどう形成されるかの原理であり、論理的根拠であり、階級闘争の持つ意味であり、それなしに〈政治〉〈政治〉とわめくことは事大主義にも転落し、マルクス主義とは縁もゆかりもなくなってしまう。グラムシの理論を批判することは、グラムシをそう言わせた根拠そのものと対決することでなければならない。

また現在的には全共闘運動として発現している学生運動をサンディカリズムであると批判しても決してそれは意味をもたない。先づ大学を封鎖しても、機動隊との攻防戦では敗北必至であることを知っており、目に見えるかたちでの獲得物はおそらく何も得られないだろう。たかだか、市民社会の分業システムの一部を少々マヒさせ、官僚機構の末端部を消耗せしめるぐらいだろう。しかし、独占の膨張の対外への転化ということは、あらたな市民社会の分解と恵腹の関係をもっており、大学が市民社会の内部であろうと、その闘争の中に政治闘争の質を内包していないとどうして言えるだろうか。確かに、政治革命があったあとでも、大学＝市民社会の問題は存続する。しかし逆に、政治革命がない限り、問題のより深化はないと認識する過程は、一般的に、〈政治革命〉を要求しているのではないという、利点も含めて切り捨てられる問題ではない。それは具体的には、ブルジョワ幻想の「大学の自治」「学問の自由」「理性の府」という近代市民社会の腐窮の反映した封鎖社会の互解であり、新たな我々の幻想の要求である。これこそが実は、著者が欲しくてたまらない綱領への道なのではないか。

プロレタリアートの革命は、市民社会の革命をその社会的内実として形成していなければならない。

「政治革命としてみるかぎり、明治以後の日本革命をもっとも実現の近くまで導いたのは、アナキズムや日本共産党に象徴されるスターリニズムではなく、北一輝に象徴される農本主義的ファシズムである。いまだかって、日本のアナキズムやスターリニズムは、文化左翼の域を脱したことは一度もない。それは知識人の啓蒙主義の段階として考えられるにすぎない。しかし、北一輝などの政治革命は絶対に社会革命を包括することができない先験性をもっていた。社会革命は、資本制を否定的媒介として肯定するという思想なしには、不可能であり、北らの思想は、この一点においては、文化左翼、知識人リベラリズムにさえ一歩をゆずらざるを得なかった。それははじめから社会革命として実現不可能な政治革命の構想にすぎなかったといいうる。」（吉本隆明「日本のナショナリズム」）という場所を引用しながら、マルクス主義の思想的優位性の問題と北の痛切な問題と、そして、トータルな視点の問題がわからないのは、また、政治と社会の構造の二重性を強調することに自らの優位性をほこるのみで、その展開がないのは、逆に言えば、自らが、スターリニズムの解体期という過渡期に存在していることの認識の欠如による。そうであるが故に、全共闘の正しい評価も、その指針たるべきものも提出できないのである。

トータルな視点を逸した、非弁証法的な方法は、平田清明の問題の所在も（スターリニズムの解体期という位相からは、滝村と別の方向からではあるが同じような問題をもっているのは面白い。）ローザの「体制の中から、体制の外のものを形成していかなくてはならない」悪循環に対してたてた問題の根拠そのものを見すえることができなくては、それはマルクス主義的には盲目である。

そうした問題は、組織論、実践論レヴェルにおける展開においてより顕著である。

著者は、一方で大衆的な思想運動と、一方で強固なイデオロギーをもった前衛〈党〉の創出がなによりも必要であると言っているように思われる。しかし、〈党〉が必要であるとするのは、正しく現実的に必要な根拠をもっているのであり現在的な階級闘争が、それまで、展開されているということの問題を正しく促えなければならぬ。しかしながら、滝村氏は、それをアプリ・オリに、国家の本質的イデオロギーであるから、何よりもまず、綱領をもった〈党〉を!!ということになるらしい。（実は啓蒙集団にすぎないのだ）。

そういうことが、本来、個人主義的な（個人というのは、あくまで国家に対して、国家に規定されての個人であって、

それは相互規程性なのである。個人をいくら強調しょうが、それは国家を乗りこえることにはならない。）、無媒介な直接的政治闘争であるところのべ平連に対する高い評価や、日共＝民青に対する評価に見られる。

しかし、「敵権力やそのイデオローグたちの間では、三派よりも日共＝民青こそ最も警戒すべき手ごわい〈敵〉だときさやかれている。」とし、それは「形骸化された下からの大衆思想運動としての革命性」に対して「激しい本能的な恐怖心を呼び起される」のだなどというある意味では、自分の登場の意味を理解できないという根拠を示す意味での政治主義的な姿を見せている。確かに、一面では、マルクス・レーニン主義を云々するという点において、そうした革命党の恐怖政治に対する恐れは、存在したのだろう。しかし、排外主義的民族主義をのたまう、思想をブルジョワジーが恐れる根拠は何もなく一方でも、ブルジョワ・イデオローグ前田一が「赤旗と戦った十年間」（「文芸春秋」）において、戦後の争議の特性が、筋金入りの指導者が一人でもあれば、簡単に大争議が展開される状態にあったから、レッド・パージの音頭をとって左翼分子を追放したら、いとも簡単に大人しくなったということに触れているのは、大衆運動と政治運動の区別がつかないところに、当時の運動の戦前的残骸があったというべきである。区別が判らないということは連関もわからないということである。そこに、労務管理上、たちの悪いことがあるかも知れないが、（政党の指示のみによる行動だから）実際には恐るるに足りないのである。それでも、日共を評価できるのは滝村氏の〈政治闘争〉と〈社会闘争〉の区別と連関が弁証法的な方法で理解できていないのではないか。

敵権力が、まこと攻撃的性格をみせるのは、闘争が、「政府打倒」の水準になった時であることは、69年の秋でよくわかると思う。（滝村氏には、闘争が「政府打倒」の水準になるということの意味が判らないだろう。）

著者が実践運動・革命運動の近くにいることを強調しながら〈党〉の問題を個定的なイデオロギーの問題に解消しているのは何故だろうか。「体系的（つまり歴史的＝論理的）展開については、『政治革命の論理』（「完成後早急に果す所存である」……あとがきによれば）というが、しかし、「その結論的な見解があちこちにいわば暗示的に示されている」とか「結論的な性格をもわせもっている」とはどういうことだろうか。（P三二八）それが秀作であるにも係らず、〈マルクス主義〉を物化し、その物化＝物指しを、あてはめ回っている感がなきにしもあらずの一つの根拠にもなっている。それは著書のとりわけ一部に見られる非弁証法的な性格である。それ故、あえてこういう言い方が許されるとすれば二部で権力論として、客観的に分析叙述せしめた内容の方が、その他で運動論を展開している内容より、よりすぐれているということはできる。

（イラザ書房・八〇〇円）

編集後記

桜の季節も中半をすぎた。今世の中では〝万国博〟なるブルジョアジーのお祭が行なわれており、人は誰でも一度行なって見たい衝動にかられるであろう。

一方における繁栄は一方における貧困を作り出し、矛盾がバクロされる。

ブルジョアジーの分断と統合の支配の論理に毒されない批判的な目をもって物事を見つめなければならないだろう。

この小冊子が配布される頃は、新入生もやっと関大の学園生活になじんでくるであろう。新しく関大人となられた諸君へ対する何かの糧として読んでいただきたい。

（A）

書籍サークル活動状況

1968～1969.3

	サークル名	発注伝数	注文冊数	渡し冊数	専門書	その他
1	法院協	37	136	127	114	13
2	司法研究会	32	170	168	151	17
3	法解釈学同志会	47	230	218	214	4
4	法律研究会	7	35	34	34	0
5	法律相談所	3	22	14	14	0
6	法律書籍購入会	10	82	82	63	19
7	法律書籍臓金	1	6	6	6	0
8	関大法律研究会	21	139	117	115	2
9	院生商学研	10	36	32	28	4
10	時代考証研究会	6	33	30	30	0
11	中国文化研究会	11	70	65	60	5
12	社会科学研究会	10	51	46	41	5
13	化学会	23	96	94	87	7
14	書道部	6	41	37	37	0
15	院生経済研	40	170	149	139	10
16	尾川原会	4	22	19	19	0
17	千里ヤングメンズクラブ	5	10	10	9	1
18	奇術研究部	3	10	10	3	7
19	国際問題研究部	2	19	18	17	1
20	中村会	9	28	27	27	0
21	白樺	6	26	26	26	0
22	なぎなた同好会	14	73	70	70	0
23	a s 会	11	76	69	69	0
24	電気工学科 '66	4	118	118	118	0
25	16人会	7	26	21	21	0
26	自然に親しむ会	7	26	26	26	0
27	安保研究会	2	4	4	3	1
28	明石ゼミ民法会	1	1	1	1	0
29	文化活動振興会	2	7	7	7	0
30	コミュニケーション研究集団	2	12	10	10	0
31	文一クラス総連合	1	37	19	19	0
32	税務会計	4	2	2	2	0
33	院生協議会	1	2	2	2	0

1969.4～1969.12

	サークル名	発注伝数	注文冊数	購入冊数	専門書	その他	
1	法友会	2	16	16	12	4	
2	千里山（F）	14	72	68	67	1	
3	法院脇	23	98	98	84	14	
4	法解釈学研究同志会	5	39	35	35	0	
5	法学研究会	11	56	48	46	2	
6	千里山（G）	3	13	12	12	0	
7	千里山（C）	29	217	210	203	7	
8	千里山（E）	8	44	41	41	0	
9	千里山（A）	31	210	204	183	21	
10	司法研	35	121	110	99	11	
11	扇荘法律研究会	8	39	37	24	13	
12	北闘寮法律研究会	6	58	51	37	14	
13	法律研究会	5	31	29	29	0	
14	法律書籍購入会	1	7	7	6	1	
15	大学院法律研究科	1	6	6	6	0	
16	経統研	18	42	38	32	6	
17	経済研究科	8	24	23	23	0	
18	院生経済研	22	89	82	82	0	
19	院生商学研	10	38	26	26	0	
20	国際問題研究部	19	60	58	56	0	
21	電院サークル	8	64	63	63	0	
22	化学会	34	170	165	128	37	世界名著、化学
23	電気工学科 '66 250各	7	41	36	24	12	文庫
24	工学部文化活動振興会	3	25	23	23	0	
25	あぷらいど '66	4	28	24	17	7	

	サークル名	発注伝数	注文冊数	講読冊数	専門書	その他	
26	方言学研究会	1	8	8	8	0	
27	書道部	1	8	8	4	4	
28	応化グループ	1	5	5	5	0	
29	ＩＥ研究振興会	2	2	2	2	0	
30	フラレタリヤーツ	1	5	5	3	2	
31	56人会	1	11	11	11	0	
32	若葉寮読書の会	1	8	5	5	0	
33	尾川原会	1	1	0	0	0	
34	The chums	19	54	49	39	10	
35	自然に親しむ会	7	34	33	24	9	文学全集
36	なぎなた	8	29	26	24	2	
37	中村会	6	34	32	28	4	
38	太陽	5	26	25	25	0	
39	16人会	3	12	9	6	3	
40	67年度史学科女子同好会	5	31	27	23	4	
41	史学研究部　古代史	2	11	11	11	0	
42	Ｐ＆Ｐ	2	20	14	14	0	
43	時代考証研	2	23	22	22	0	
44	白樺	8	40	39	31	8	
45	社会科学研究会	17	74	66	66	0	
46	ａｓ会	23	149	133	68	65	岩波新書
47	沖縄研	3	9	7	7	0	
48	中国文化研究会	16	103	99	99	0	
49	電気物理	1	2	0	0	0	